



わたしの王国

山本容子

銅版画家は、何かに刷らないと作品のイメージは定着しない。銅を削っているだけでは作品にはならないのだ。わたしの場合は、イメージを刷り取る相手の99・5%が紙で、あとの0・5%が布などで、まさに紙なくては、成り立たない仕事だ。

銅版画の歴史は西洋から来ているので、紙は銅版画用に開発されたものを使っている。今使っている紙は、ドイツ・フランス、そしてイギリス製だが、特に気に入っている紙は、フランス製だ。なぜなら紙の色はニロアンスが好きたから。ひとつの作品にどの紙を使うか。まずは専門的な技術に耐えられるかどうかというのが基本だが、その紙のテクスチャーについて考えることは、絵の具の色を選ぶことと同じくらい大切な要素だ。たとえば、表面がつるつるしているか、あるいは凹凸が感じられているか、こ

とも絵の要素になるので、描いた絵のイメージによって刷る相手を変える。

色も同じこと。白、クリーム色あるいは少しグレーっぽい紙がいいのか、少しの色の変化に反応して創った作品のイメージに一番ふさわしい紙を選ぶ。

以前、白黒の作品を創っていた時は、白い紙を使っていた。白も固いよって色が違う。ブルーがあった白もあれば、クリームに近いあたかな白もある。どの白を選ぶかで刷り上った作品のイメージが変化する。このような経験をした上で、二、三十年くらいは、銅版画を刷ってから着彩して作品にすることが多いので、使用する紙を選ぶのには絵の具の色がどう映えるかも合わせて考えなくてはいけない。

今、好んで使っているのが、フランスのアルシュ社のクリームとグレーだ。紙の色を一つと考えると、絵の具の白が色として使えるのだ。白い絵の具には光を感じるので、わたしの大切な絵の要素になっている。

紙は買ってからしばらく寝かせておくことよ。枯れたいい状態の紙になる。時間を経て紙が落ち着き、紙の本質がよりはつきりするよつに思える。銅版画はちょっとしたキズも表現になるが、また新しい紙だと厳密に言つと粗密度が高いま

山本容子(やまもと・ようこ) 1952年、埼玉県生まれ。京都市立芸術大学美術専攻科修了。抜群の構成力と印象的な色使いで、洒脱で洗練された雰囲気を持つ独自の銅版画の世界を確立。数多くの書籍の装幀、挿画を手がける。近著に『Jazzing 山本容子のジャズ絵本』(講談社)、『マイ・ストーリー』(新潮文庫)、『シェイクスピアのソネット』(文春文庫)など。5月10-16日、丸善日本橋店にて展覧会開催。インターネット上に山本容子美術館、LUCAS MUSEUMを開設している。
<http://www.lucasmuseum.net>



で、その繊細な線を拾えないと感じたことがあった。紙は生き物に似ているかもしれない。二十数年前にイギリスのある紙がもう手にはいらなくなると聞き、買込んだ。水彩用の紙だけれど、いつか描く時が来ると思っている。そう考えると持っているだけで幸せになる。

銅版画は、銅板を自分の好きなサイズに切る事ができる。紙に刷る時も、作品のイメージによってサイズを自由に変えることができる。このことがなんとも嬉しくて面白い。

普通に暮らしていると、本もノートも名刺も、サイズは全て常識と効率に縛られた規定のものばかりだ。少しでも定型からはずれたものを量産しようとする、「高くなりませう」と言われてしまっけれどアーティストは、自分の作品を自分のイメージサイズで自由に創り出せて、定型や規制から逃れられる。これは神様になつたような気分なのだ。紙の王国に住む者だからこそ味わえる特別な自由だ。

PAPER Q & A Vol.12

Q. 段ボールの原料は、ほとんどが古紙って本当ですか?

A. 段ボールはリサイクルの優等生です。

段ボールの原料は、ほとんどが使用済みの紙だと知っていましたか? 他の製品に比べても、古紙が非常に多く含まれています。日本では、リサイクル機構が効率的に機能しており、使用済みの段ボール(段ボール古紙)もほとんどが回収され、新しい段ボールの主原料として再生されています。段ボールは、地球にやさしく、リサイクルの優等生です。高い回収率を維持するため、消費者の皆様への排出を容易にする、潰しやすく畳みやすい段ボールの開発も進んでいます。

段ボールリサイクル協議会では、製造



から回収までの工程に関わる者が協力しながら、段ボールの更なる効率的な利用の推進に努めています。

今回は5月3・10日号、平田オリザさんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo: Shiro Miyake